

昔話を語る/書く：
戦後農村婦人のリテラシーという視点から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 敬一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007219

昔話を語る／書く

―戦後農村婦人のリテラシーという視点から―

Telling / Writing Old Stories

はじめに

女性が昔話を語り、あるいは書き記すことを可能とさせていった社会的な条件について、戦後の農村を生きた二人の姉妹を対象として論じること。本稿の課題を一言でいえば、そうなる。より具体的に論点を絞れば、新潟県岩船郡という地域設定のもとに、婦人会およびそこから派生した各種婦人グループの活動や同人雑誌への参加という問題が、昔話を語る／書く営みに関連するものとしてここで取り扱われる。農村の婦人たちにとって婦人会や同人雑誌への関与は、必然的にそれまでとは異なった形での他者とのかわりを可能とさせた。そこで可能となった主体のあり方の問題として、昔話を語る／書くことは位置付けられるのではないか。そうした見通しのもとに、本稿の論は展開する。

従来の昔話の研究史で言えば、ここでの観点は語り手論と一定の接点を持つものだ。とりわけ、語るのが女性という点に目を向ければ、まず野村純一の見解をここで踏まえなければなるまい。野村は昔話の語りを中心権の譲渡と関連付ける。嫁の間はけっしてカカ座に座することはでき

矢野 敬 一

(YANO Keiichi)

(平成二十四年十月四日受理)

ず、それがゆえに語るに安定した場所に恵まれない。嫁から主婦に転じて、初めてそれは可能となる。「主婦権の譲渡こそは、カカ座における昔話伝承の実相、実態を如実に反映し、かつ語りの座の交代劇の象徴であった」とし「家を継ぐ者が、よく語りを管理する。これがわが国に認められる昔話伝承の一特性ではなかったであろうか」と野村は述べる〔野村 一九八四 一六五―一六七〕。

野村の論は家族の成員権の移行という観点から、昔話の語り手の性格を位置付けるものである。たしかに家屋に囲炉裏が据えられ、かつそれが機能していた時代には、横座、カカ座といった座の持つ意味は大きかったであろう。しかし現在の昔話の語りを想定した場合、囲炉裏自体が家屋から消えてしまっていることを勘案しなければなるまい。主婦権の相続といった事態も、過去のこととなつて久しい。野村の論は、ある特定の時代状況のもとではじめて説得的であることを、ここで注意しておこう。その意味で語り手が生きた人生の経験の中に昔話の語りを位置付けることの重要性を説き、「高度成長の過程で急速に変化していく地域社会の状況の中での昔話の語りの継承を考える必要があるはずであ

る」とする川森博司の指摘に耳を傾けたい〔川森 二〇〇〇 一七二〕。ただし一言添えれば、語りの継承をめぐる社会的な状況変化とは、メディアを取り巻く社会状況や人と人との関係性の変容をも、視野に入れたものでなければならぬ。たとえば本稿で扱う、同人雑誌の発行や婦人会活動が活発化していた一九六〇年前後という時期にも、目を向ける必要がある。

さらにこうした語り手に焦点を据えるアプローチは、ライフ・ヒストリー研究とも一定の接点を持つ。「昔話の語り手―語り手のライフ・ヒストリーについて」で武田正は、この問題について三つのポイントを挙げている。本稿との関連で言えば、「語り手のライフ・ヒストリー」という場合には、その時代、その社会の、家と村落共同体の関係の中でこそ、その語り手の生活があること」という指摘が重要だ〔武田 一九九三 二九一〕。武田の場合、この前後の脈絡で木小屋や娘宿が言及されているので、ここでの村落共同体とはこうした場が機能していた状況のもので、このものとみなすべきであろう。とはいえ村落共同体的規制が次第に及ばなくなっていく時代にあっても、村落が何らかの形で保持する共同性との関係の中で語り手が位置付けられなければならないまい。戦後でいえば、たとえば婦人会やそれに関連する婦人グループの存在が、ここでは重要となってくる。

一 昔話を語る／書く 婦人会・各種グループ活動との関わり

本稿で対象とするのは、新潟県岩船郡山北町さんほくまち（現・村上市）のA集落に住んでいた二人の姉妹、石山タツエさん（一九一七―一九九八）と加藤フジさん（一九一九―二〇〇六）が語る／書く昔話である。筆者はこ

の二人の昔話について、すでに「姉妹が語る昔話―同一経路からの話の語られ方の相違」と題して報告をしている〔矢野・国原 一九九二〕。ここではその報告を踏まえて、二人が関係した婦人会および婦人グループに言及し、昔話を語る／書く行為をより広い文脈から押さえることにしたい。なお山北町は平成二十（二〇〇八）に村上市と合併して行政区分上、その名前は失われたが、この二人の存命期間を勘案して以下、自治体名としては主に山北町を用いる。

論議の主な時代設定は昭和三〇年代なので、山北町の概況も昭和三五（一九六〇）年の農業センサスによって述べることにしたい。山北は新潟県の最北端に位置し、地形的には日本海に面する一方で背後には広大な山林が広がっている。当時、まだ行政的には村であった山北の総人口一万三千人強のうち、統計上、農家人口は九千三百人ほどと大半を占めていた。とはいえ農家総数一千四百世帯のうち、第二種兼業農家が八百世帯ほどと過半数を超えているのが実態だった。経営耕地規模を見ると、〇・五ヘクタール以下の世帯がちょうど半数となっていることからわかるように、規模からいって農業単独では生計を維持できない状況にあった。したがって林業経営をし、あるいは大工として出稼ぎに出るといったように多様な生業を組み合わせて世帯を維持していたのが、この時代の山北である。昭和三〇（一九五五）年に五か村が合併して山北村が誕生するまで、A集落は八幡村の一部を構成する集落で、戸数は明治以降、大体三〇戸前後で推移してきた。耕地面積も狭小で山林への依存度が高いという点で、山北の典型的な集落である。

二人のプロフィールについて触れよう。姉のタツエさんは大正六（一九一七）年生まれ。ごく幼くして亡くなった者を除くと、六人兄弟の上から三番目で、長女。一方、フジさんはタツエさんのすぐ下の妹で、

表1 タツエさんの昔話一覧

話 者 題 名	『日本昔話大成』題名	話型番号	話を聞いた相手
蛇髻入	蛇髻入(水乞型)	101B	祖母
猿髻入	猿髻入	103	祖母
蛙の嫁	蛙女房+食わず女房	111+244	母親
かにの昔	かにの甲	193	祖母
(話者題名なし)	大歳の客	199A	祖母
化け猫の話(断片)	猫と南瓜	254	母親
古狸と小僧	狸の八置敷	266	祖母
アネ様やーい	(なし)	(なし)	隣家の炭焼きの老人
馬鹿アニヤサ	沢庵風呂	349B	母親
屁っこき嫁	屁ひり嫁	377	母親
フーフーパチパチ	小僧改名	534	祖母
うそ昔	短い昔	640	祖母

教科だった。本ならば何でも好んで読み、小学校の高学年にもなると『少女倶楽部』をはじめとした雑誌や各種の小説を愛読するようになった。一八歳で体調を崩して家で六年ほど養生をしていた間は、読書が一番の楽しみだったという。高等小学校を卒業後、新潟市に住んでいた長兄の元に身を寄せて二、三年ほど裁縫の学校に通って技能を身につけた。地元に戻ってから婿をとり、A集落に住まいを移す。洋裁や和裁を仕事とし、その合間に山林の手入れをするような生活をしてきた。子供はいない。平成一〇(一九九八)年に物故された。

大正八(一九一九)年生まれとなる。共に出身はA集落の隣に位置する集落で、実家では農業や林業を営むかたわら祖父は木工を、そして父は漆の塗り師をもつとめていた。水田の所有面積は約一町で、周辺でも目立って多い方だった。したがってその半分は小作に出していたという。二人が幼いころ、両親、祖父母ともに健在だった。タツエさんは子どもの頃から学校の成績がよく、国語や綴り方が得意

この二
人による
昔話は、
表1と2
に掲げた
通り。タ
ツエさん
の話は
一二話、
フジさん
の話は
一八話を
数える。
これは筑
波大学第
一学群人
文学類の
学生だっ
た国原

表2 フジさんの昔話一覧

話 者 題 名	『日本昔話大成』題名	話型番号	話を聞いた相手
トラヒラの橋の狐	尻尾の釣	2A	祖母
猿髻入	猿髻入	103	母親
蛙の嫁	蛙女房+食わず女房	111+244	母親
くも退治	三人兄弟(化け物退治型)	177	祖母
(話者題名なし)	大歳の客	199A	祖母
地藏様の話	笠地藏	203	祖母
狐の恩返し	狐遊女	239	母親
化け猫の話	猫と南瓜	254	祖母
(話者題名なし)	化物寺	259	祖母
古狸と小僧	狸の八置敷	266	祖母
狸退治	狸の八置敷	266	祖母
アネ様やーい	(なし)	(なし)	隣家の炭焼きの老人
貧乏の神	(なし)	(なし)	姑
馬鹿アニヤサ	髻の挨拶	336A	母親
団子の話	団子髻	362A	母親
屁っこき嫁	屁ひり嫁	377	母親
神主・医者・鍛冶屋の異土行き	閻魔の失敗	442	姑
フーフーパチパチ	小僧改名	534	祖母

フジさんは高等科を卒業後、家業の農家を手伝い、その後昭和一九(一九四四)年にA集落に嫁ぐ。嫁ぎ先には夫の両親がおり、水田を二反七畝、畑を一反五畝、山林を二町ほど所有していた。しかしそれで生活が全てまかなえていたわけではなく、フジさんの夫は役場に勤務し、また冬期間は麴の製造、販売も行っていた。一男一女をもうけている。平成一八(二〇〇六)年に物故された。

(旧姓・大江) 景子が、卒業論文をまとめるため昭和五六(一九八一)年に山北町で行った調査の折に録音したテープを、筆者が借り受けてテープおこしをし、さらに補足の聞き取りを行って整理したものである〔矢野・国原 一九九二 一一八―一二九〕。

昔話を二人に語って聞かせてくれたのは、主に実家の祖母と母だったという。祖母は山形県庄内地方の出身で、養女として迎えられ、その後婿をとって家を継いだ。昭和七(一九三二)年に七十二歳で物故している。他方、母は庄内地方の出身で明治一九(一八八六)年生まれ、亡くなったのは昭和二一(一九四六)年である。とりわけ祖母は昔話を語るのが得意で、冬の夜はタツエさん、フジさんたち孫を囲炉裏端に集めては聞かせるようにしていたという。その話はおもしろおかしく、印象深いものだった。読み書きは全くできなかったといえ大変記憶力のよい人で、昔話に加えて口語りの『小栗判官』は、強く二人の脳裏に刻み込まれている。実家には和綴じの『小栗判官』の筆写本が残されていた。ページ数でいえば二百ページを超えるこの本を、祖母は全て暗記しており、正月二日の晩から幾晩にもわたって語り続けるのを慣例としていたのだった。それに対して母の語る昔話は、祖母のものに比べて短く、簡素だという違いがあった。

昔話の伝わった経路は、それだけではない。二人が実家にいた頃は、隣に住んでいた炭焼きの老人も、作業の合間に昔話を語ってくれた。またフジさんの場合は、嫁ぎ先の姑がよい語り手だったという。とはいえ別表にあるように、その話を聞いた相手をリストアップすると、タツエさんの場合は十二話中、七つが祖母、四つが母親、フジさんの場合は十八話中、九つが祖母、六つが母親といったように、祖母と母親双方から聞いた話が占める割合は、圧倒的に高い。

昔話の聞き手であった二人が、長じた後、昔話を語り／書く機会はどういうものだったのか。子供のいなかったタツエさんの場合はともかくとして、二人の子供を持つフジさんは子供が小さい頃、冬ならば自身が機織りをしながら、また農作業のできる季節ならば畑の草取りを手伝わせながら語るといったように、さまざまな機会に語って聞かせたという。ただし、それだけではない。ここで目を向けておきたいのは、昭和三〇年代、地元の公民館報に「方言民話」という連載が掲載されるようになっており、二人ともそこに昔話を紹介していることである。昔話を語るといっただけではなく書くという営みが、あらためてここで問題となつてこよう。

二人が住む旧八幡村他五か村が合併して山北村が誕生した昭和三〇(一九五五)年に、『山北村公民館報』第一号が刊行された。その後、昭和三二(一九五七)年に『公民館報さんぼく』(以下、『館報』と略記)と改題してページ数も表裏二ページから四ページへと増し、より充実した内容とするべく衣替えしている。

連載の「方言民話」第一回が誌面に登場するのは、昭和三二(一九五七)年一二月発行の『館報』第二五号だった。この連載に至った経緯を示す記事が、同年の『館報』第二二号掲載の「グループ報告／方言民話の集成をめざす／大毎あざみの会」である。グループ報告とは、この当時盛んだった婦人グループの活動の紹介を目的とした内容の記事だ。執筆者は「黒川俣支館・斎藤勝弥」。公民館は合併前の旧村単位で支館が置かれており、黒川俣支館もそのひとつだった。斎藤勝弥は後述する同人誌『地ひびき』で、山北地区の中心的役割を担うことになる人物である。その昭和三八(一九六三)年時点での同人名簿を見ると、職業は農業で年齢が四八歳となっているので、『館報』掲載時点ではまだ四二歳だった

たことになる。斎藤はもとも新聞記者であったが、敗戦を機に地元に戻り、農業の傍ら文学に親しんでいた。加えて公民館書記として、公民館活動にも打ち込む日々を送っていた人物だ。

「民話」の集成が何ゆえ婦人グループの活動の一環として取り上げられたのか。斎藤は先の記事の冒頭で、黒川俣地区でも婦人会の活性化と並行して各種婦人グループ活動が盛んになってきた、と述べる。集落の一つ、大毎でも九人の主婦によって「あざみの会」が営まれており、斎藤がそこに招かれた際、何かを記録する作業を勧めた結果が「方言民話の採集」だったのである。「南部方言民話集『すねこ・たんぼこ』の素晴らしさと、民話の民俗学的重要性に刺戟され、歴史研究熱に培われての企画といえ、いささか大げさでしょうか」と、斎藤は企画に至った契機を書きとめた。

この当時、民話は「民衆の話」という意味を担って使われるようになり、主にアカデミズムの外側で一つの運動として展開していったと、重信幸彦は述べている。その整理に従えば、民話運動の展開の一つの画期となったのは昭和二七（一九五二）年、木下順二や松本新八郎らによる「民話の会」の設立であった。その後、昭和三三年に月間機関誌『民話』が創刊。そこでの「現代と切り離さず」口伝えの話を考えろという態度は、それまでほとんど対象化されてこなかった「世間話」や「現代の民話」を新たな問題として見出ししていく（重信 一九九七 八六―八七）。斎藤が先の一文で触れていた『すねこ・たんぼこ』は有光社から昭和一八（一九四三）年に出ており、昭和三三年一月に今度は「日本の昔話」シリーズの一冊として未来社から刊行された。未来社は『民話』を発行し、また「日本の民話」シリーズを刊行するといったように、民話運動を出版面で担った出版社である。斎藤が手にしていた『すねこ・

たんぼこ』自体、当時の民話運動という脈絡に位置付けられる性格のものだったことは確かであろう。未来社版の『すねこ・たんぼこ』第一集の奥付を見ると、「この本は数多くの原話の中から編集したものです。無断で脚色、上演、放送、再録をしないよう」にと、注意書きが付されている。ここから当時の民話運動は、民話を元に脚色や上演、放送を行うことも前提にしていたことがうかがえよう。

斎藤が婦人グループに「方言民話の集成」を推奨していた時期は、雑誌『民話』の刊行はまだだったものの、民話運動自体は大きく展開していた時期と重なってくる。とはいえ斎藤自身は、婦人グループでの活動をそのまま民話運動に接続させようとしていたわけではなかった。「方言民話」についての斎藤の評価を見ると「その生き生きとした表現、適切にして独自の形容詞、巧まざるユーモア等々、誠に宮沢賢治童話の根底を探る秘密鍵がここにも隠されている」とし、「既成童話作家の紋切型童話など遠く及ばない魅力を蔵している」というものだった。童話として「民話」を位置付けるのが斎藤の立場であり、民話運動のように直截に「民衆の話」の掘りおこしをめざしていたのではない。

「民話」の集成を勧めた主婦グループへの期待は、斎藤にとって「あざみの会の方々が、ものを書くという経験を積まれ、ご自分の子供さんに、自分で記録した童話を残され、しまいに創作童話の方面にまで進まれたら、どんなにか素晴らしいか、と夢みている次第であります」というものだった。ここで斎藤は具体的に「民話採集試案」としていくつか注意点を挙げ、「なるべく古くから当地に伝わるものを、方言そのままに記述する」べきだと、まず言及する。さらに「決して勝手に筋書きや表現をかえない」という文言もあるので、昔話を子供向けに脚色した童話の創造を一義的にめざしていたわけではない。しかしこうした活動

を通して、最終的には創作童話の創造を主婦たちに期待していたことが、斎藤の文面からは伝わってくる。

斎藤の提言は当時の主婦層に対して、二つの性格を帯びた主体となることを要求するものだった。まず嫁という立場にある世代層が昔話を集め成し、さらに子どもたちに対して語りかけていく主体になるということが一つ。タツエさんやフジさんにとって昔話とは、祖母つまり姑が主に語るものであったことを勘案すると、ここでの呼びかけは嫁としての立場の独自性を昔話によって主張するものであったことになる。次いで目指された主体の内容は、口承ではなく文字を通して昔話を対象化し、さらに自らが創作童話の書き手となるというものである。後述するように、ここには女性のリテラシーに関する新たな編成という大きな問題が絡んでいることになる。たんに昔話を集めるにとどまらない射程を、斎藤の提言ははらんでいたのである。

『館報』を見ると、昭和三七（一九六二）年まで断続的に六回ほど「方言民話」が掲載されている。基本的に大毎集落の主婦が書き手となっているものの、昭和三四年の第三五号にはフジさんの「働き者に金が授つた話」、三七年の第六四号にはタツエさんの「利こうな小僧」が誌面に登場する⁽¹⁾。これは斎藤と面識のあったタツエさんが、まず妹であるフジさんに原稿を依頼し、その後自らも文字化したのだったという。二人とも居住しているのは大毎集落ではなかったとはいえ、婦人会およびそこから派生した婦人グループへの活動に積極的だったことで共通する。斎藤との接点も、そこからのものだ。その結果、まだ三〇代後半から四〇代前半であった二人が、文字媒体を通して昔話を提示することになったわけである。

石山さんが実際に語った昔話「フーフーパーパチ」と昭和三七

(一九六二)年に『館報』に掲載した「利こうな小僧」とを比較すると、語りによる昔話と文字媒体によるそれとの差異が端的にうかがえる。この両者は題名こそ違うが、同じ内容の昔話である。本稿末尾に参考資料として掲載しておいたので参照していただきたい。とりあえず語りによるものを口承版、『館報』に掲載されたものを文字版として区別しておこう。

口承版と文字版との違いは、まずその長さである。前者の方が後者よりも、ほぼ倍近い字数となっているのだ。口承版が長くなった理由は、文字版には限られていた会話体の部分が多用されていることに起因する。会話では同じような語が繰り返され、それによって生じるリズムが文字版にはない響きの印象を昔話に与えていく。口承版の題名にもなったフーフーパーパチという擬態語の使用も文字版では二ヶ所に対して、こちらでは六ヶ所にも及ぶ。こうした擬態語を繰り返すことによって、語りとしてのリズムがより一層強調され、聞き手の耳に心地よく響いていく。口承版の語りを収めたテープでは、ところどころ石山さんの楽しそうな笑い声も含まれている。小僧のとなちが和尚さん夫婦をやりこめるという、笑話的な要素がここでは聞き手に対して巧みに訴えかけられているのだ。対面的な状況のもとでの語り手の笑い、そして同じ語の繰り返しによって生じる語りのリズムは、文字として伝えようにも難しいだけに、語りとしての独自の魅力に満ちた部分となる。文字版との最大の違いはここにある。

他方、文字版はこの話の骨子を刈り込んで手短にまとめた感が強い。むしろ、内容が異なっているわけではない。掲載するのが自ら住む村の住民を讀者層とする『館報』であり、要点を伝えればそれで済む、という判断が働いたからかもしれない。紙数の都合もあったろう。しかしそ

の記述を見ると斎藤勝弥が主張した「方言そのままに記述する」「筋書きや表現をかえない」という指示を忠実に守ろうとする姿勢がうかがえ、それがゆえに全体的に抑制的なトーンになったものとも考えられる。

斎藤が「民話」の集成を通じて婦人に求めたことの 하나가、「ものを書く」という経験」を積むことである。石山さんは後述するように前年の一月、集落内の女性同士で『廻覧文集』を始めたばかりであった。文章を書く経験を積もうとする石山さんの生真面目な姿勢が、文字版の昔話の記述にも反映されたのではないのか。口承版、文字版の二つからは、昔話を語る／書く主体としてのあり方の違いが浮かび上がってくる。しかしこの両者は対立するものではなく、婦人に対しても一定のリテラシーが求められていたこの時代、同じ一人の人が時と場合によって使い分けるべきものとして位置付けられていたのだった。

全国的な動向としていえば、まず一九六〇年度以降、飛躍的に政府の婦人教育政策が強化され、それは実質的には地域婦人会を中心にした事業として展開していく流れがあった。それと同時に高度経済成長政策の結果、農村を主な基盤として成立していた地域婦人会がその後、次第に衰退、解体していくという動向にもなっていく〔千野 一九九六二〇七〕。山北の場合、一九六〇年度を境として大きな変化はあったのか。この年の『館報』第四八号の「第六回山北婦人大会／六百余名参加して下海府中中」という見出し記事からは、その一端が読み取れる。当日の参加者の声として、「聞くところによれば今までにない盛会」という感想が紹介されており、婦人教育政策がある程度、功を奏していたことがうかがえる。またこの記事のすぐ下にはフジさんが「婦人学級研修会への参加記録」という一文を寄せており、目を引く。これは山北での第一回婦人学級の研修会へ参加しての感想を述べたものであるが、こう

した研修会が新たに開催されるようになったのも、行政による予算措置の結果と判断される。

昭和三〇年代、さまざまな婦人会関連の集まりにタツエさんとフジさんは積極的に参加していく。その場は大きくいえば行政によって組織された婦人学級と、集落単位でのよりインフォーマルな婦人グループとに二分される。前者の一例として、タツエさんが加わった昭和三七年（一九六二）年度の山北村中央婦人学級の様相を取り上げたい。

山北町役場に保管されていた「昭和37年度婦人学級関係綴」に収められた文書によれば、この年度に開設された村内の婦人学級は全部で八学級。これは対象区域によって全村単位、旧村単位、集落単位に三分される。全村を対象としたのは文部省委嘱扱いの山北村中央学級で、タツエさんはこの学級に参加した。六月から翌年の三月まで毎月四時間から六時間、学習の時間が設けられており、内容は「新しい家庭の人間関係」「家庭教育」「合理的な消費生活」「家庭管理と主婦の役目」といったように家庭生活に関連したものとなっていた。参加者総数は五二人。職業別構成をみると、農林水産業としている者が四一人で、全体の約八割を占めていた。年齢別構成で一番多いのは、三〇～三九歳の範囲で、その数は二六人と全体の半数となる。二〇～二九歳の者は一人に過ぎないが、この両者あわせて嫁の立場にあると思われる三〇代までの者が、参加者の過半数を占めていたことがわかる。逆に明らかに姑の立場にある五〇～五九歳の参加者は、八人を数えるだけであった。

この婦人学級関係綴には、個別に記入がなされた「婦人学級についての感想」も綴じ込まれており、タツエさんの感想も収められている。「私は大勢の人の静聴の中で、発言すること、ペンを持つことのむづかしさを覚えました。併し度重なる中に少しでも前進を感じることは嬉しい

ものでございます」という一節からは、婦人学級がその教える内容とは別に、他者に対して言葉を発しあるいは文字を書き記すための場として積極的に受け止められていたことをうかがわせる。『館報』を見ると、この中央婦人学級には昭和三九年度、フジさんも参加していることがわかる。こうした中央の婦人学級ではなく、旧村あるいは集落単位で婦人学級やそこから派生した婦人グループによる活動が多様に展開していたのが、この時期だった。

タツエさんやフジさんが、こうした場に自ら参加していったのはどういった理由からだったのか。一番大きな理由はそれまで同世代の女性同士が集まる機会が、きわめて限られていたということである。かつて集落内で定期的に女性が集まっていたのは、年配の女性による念仏講程度しかなく、嫁世代にはその機会もない。それに対して婦人会関連あるいはPTAの集まりは嫁世代が参加でき、しかも友人ができて横のつながりが広がる。さらにも出席しても経費は不要で、息抜きや勉強にもなる。

フジさんは嫁ぐ時、母から「嫁は一生懸命に働くもんだ、ねっける（不機嫌になる）もんじゃない」と諭されたという。しかしこうした集まりに参加してもせいぜい半日程度で済むので、朝夕いつも以上に働いておけば仕事の遅れも取り戻せ、姑の不機嫌を損ねることはない。周囲の嫁の中でも、こうした集いに出席する者が出るようになっていた。二人の母が嫁だった時代にはこの種の集まりは皆無に近く、実家に年に何度か帰省する位しか息抜きもなかった、そのころの嫁は牛馬同様に働かされ、気の毒なものだったとはフジさんの言葉だ。フジさんは婦人会の集いの分科会などで書記や司会を任されることもあり、積極的に文字を書き、あるいは言葉を発する機会を持つことができたという。

「方言民話」の集成を嫁世代の婦人に提言するには、こうした世代の

女性が集落の中で一定の社会的地位を確保していることが前提となる。婦人学級やPTAといった集いによって保障される嫁世代の社会的地位は、一方で昔話を語る／書く主体を可能とさせるものとなっていく。タツエさん、フジさん姉妹が子供の頃、主に昔話を語ってくれたのは嫁である母ではなく、姑の立場にある祖母だった。しかしフジさんが母親になったときには、嫁であるフジさんが子供に数多くの昔話を語り、さらにタツエさんともども『館報』に文字化した昔話を寄せるようになっていた。山北では主婦が独自の昔話集を編むというところまで「方言民話」集成の試みは達することはなかったものの、昔話を語る／書く主体としてこの時代、農村部の嫁は自らの地位を確立していったことは確かである。

二 廻覧文集と同人雑誌 女性のリテラシー

行政によって組織された婦人学級や各種の集いは、他者に対して自ら言葉を発し、文字を書き記すための場としての性格をも帯びていた。それはさらに各種の文集作成という形で結実していく。よりインフォーマルな集落単位での婦人グループでも、事態は同様であった。

こうした動向はより広い文脈に即していえば、戦後の生活記録運動の展開と関連付けられるものである。辻智子の整理に従えば、一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、地域の青年たちによる生活を綴った文集や学校での生活綴り方実践といったように、「書く」営みが展開するようになっていく。それに触発されて工場労働者による文集も登場する。このような生活記録運動は、しかしながら五〇年代後半になると、若干の事例を除けば女性、とりわけ農村女性の生活記録運動以外、ほとんど

報告されなくなっていく〔辻 一九九八 八〇〕。生活記録運動の概観については、その当事者でもあった鶴見和子も同様の見解を示す。それによれば一九五一年から六〇年代の初めまでが、生活記録運動の初発期と高潮期であり、六〇年安保が終わった頃以降から沈滞期に入っていくという〔鶴見 一九九八 六〇四〕。

山北での婦人による文集刊行は、生活記録運動が全国的に見れば沈滞していった時期にあたり、辻の指摘に符号する。管見した範囲では集落を単位とした山北村北中婦人学級による『かがみ』、旧村単位の八幡婦人学級名義による『灯』^{ともしび}が刊行されており、創刊はともに昭和三八（一九六三）年のことであった。後者は八幡婦人学級となっているが、実際にはタツエさん、フジさんのいるA集落の婦人グループによるものである。

『かがみ』創刊号は謄写版印刷による二二ページのもので、二六人の婦人の文章を収めている。その巻頭言は「朝な夕な、『かがみ』に私を映しだすとき、私は『かがみ』のなかの私にこのころを見出すよう努力することにいたしました。／うつくしいところ、みにくいところ、それがそのときに、そっくりそのまま私の『かがみ』に映るようになったとき、『かがみ』は私のいのちであるといえましよう」とある。文章を記すこと、それが自分自身を見つめることでもあること。ここには当時の生活記録で目指されていた一端が示されている。しかも身だしなみに使う鏡を比喩としているところに、女性としてのリテラシーがはらむ独自性の強調が読み取れよう。

『かがみ』は年に一度の刊行で、筆者の確認の範囲では昭和四一（一九六六）年の第四号で終刊となっている。四年ほどで文集が終息したのは、次第に婦人学級の活動が停滞していったこともあるが、文章

を「書く」ということ自体への抵抗感が背景にあったことも確かである。第一号所収の「婦人学級をかへりみて」という文章は、端的にそのあたりの事情をうかがわせる。「鉛筆をもつことの少ない私たちにとつては何か少しでも書くことが難しくなりいやになって来ます。それはいざ書こうと思えば必要な字が想い出されなかったり、文のしめく、りがまとまらなかつたりする事がいらだたしく感ずるからではないでしょうか」と、ここで述べられているのである。一方の『灯』は『かがみ』よりは長く続いた。筆者の確認できた範囲では、昭和四七（一九七二）年に発行された第九号で終刊を迎えている。長く続いたのは編集に携わったタツエさんの尽力という条件に負うところが大きかった。逆にいえばそうした個別的な条件がなければ、文集の継続には困難が伴っていたということになるうか。

婦人会やそれから派生する婦人グループでの集いは、参加者に自ら文字を書き記すことを促すような性格を帯びたものではあれ、その一方でそれに抵抗を感じさせる状況があったことも確かである。こうした力の拮抗のもとに、婦人たちによる文集は布置していたというべきであろう。したがって後者の力が強まれば、文集の発行という事態は頓挫せざるを得なくなる。

文字を記すことへの抵抗感は、リテラシーをめぐる女性の規範意識や進学をめぐる男女差の問題にも深く根ざしたものだ。明治の頃までは山北でも女性が小学校を卒業後、進学を希望しても生意気でノメシコキ（怠け者）になるだけだと、否定的風潮が強かったという。タツエさん、フジさんの母親にしても小学校にすら充分に通学することができず、自分の名前の読み書き程度がやっとだった。大正時代に入ってから事情はさして変わらず、たとえば尋常小学校を終えて高等科に進学できた

者の比率には大きな男女差があった。大正八（一九一九）年生まれのフジさんは高等科に進学できたものの、進学者三〇人中、女性は全部で八人に過ぎなかった。小学校卒業者は男女それぞれ大体三〇人、合計で六〇人いたので、高等科への進学率は大雑把に言って男性は四分の三近く、それに対して女性は四分の一をわずかに上回る程度だった。ここには大きな男女差が存在していた。高等科に進学できたフジさんにしても、兄弟の進学状況を見ると男女間で大きな格差があったことは否めない。長兄は加茂の農林学校を卒業、二番目の兄は高等科を卒業後、青年学校に通ったり上京して夜間の商業学校に短期間通学したこともあったという。タツエさんが高等科を卒業後、新潟市にある裁縫の学校に通うことができたのは、病弱で農作業には不適だと両親が判断したという事情があったからに他ならない。

農村部では都市部と比較してリテラシーに対して相対的に否定的であり、さらに進学率に表出されているようにそこには目立った男女格差が伴っていたことを見落とすべきではない。そうした事情は労働にまつわる規範意識にも反映されていく。タツエさんもフジさんも小さい頃には、読書に対して特に注意を受けるようなことはなかったという。父が自身自身、読み書きをすることが好きだったことが大きかった。しかしフジさんが高等科を卒業し、自家の農業の手伝いをするようになると事情は一転する。母がしばしば「おなごめえざ（女のくせに）書物しょもつながめたりして。おなごは目のふくろび開けたら（目を覚ましたら）、仕事を持つもんだ」と、小言を言うようになったのである。本でも雑誌でも文字のあるものを、「書物」と母は総称していたのだった。とはいえいくら文句を言われても、母のいない隙をぬってフジさんは活字を読むようになっていた。それを母も心得ていて、「おれが寝たら最後、書物持ってきて

見てるんだらう。ちゃんとかかるんだ。」などと口にするのはしばしばだった。母の若い頃には毎朝三時四時に起床して農作業に従事し、休みも一年に数えるほどしかなかったとフジさんは聞かされた。そうした時代の労働規範を、自分の娘に対しても及ぼそうとしていたわけである。

高等科を卒業してからのフジさんは、どのような読書をしていたのだろうか。定期的に手に入った雑誌が『婦人倶楽部』だったという。親戚で小学校の教師を勤めていた者が定期購読していたこの雑誌を、自分が読み終わった後、毎月持参してくれていたのだった。一〇年ほどそれが続く。読むことができるのは夜、もしくはたまにある休みの日に限られていた。昼日中に読書をすることは、とても許されることではなかった。夜間といっても母が起床している間は針仕事など、しなければならぬことが多々、あった。体が弱かった母が家族の中でいち早く就寝した後、読書をしようと思えばできる時間がようやく訪れる。居間にあたるダイドコロには電灯があったので、そこが日常の食事や仕事の場だけでなく、読書の場にもなった。

タツエさん、フジさんとともに何らかの文章を日常的に書き記すような生活であったわけではないが、読書に対しては当時、例外的と言ってよいほど寛容な家庭状況のもとにあった。それでも読書が労働規範と摩擦を起こしかねない性格のものだったことは否定できない。実家の父は、たとえば新聞を定期購読しており、隅から隅まで目を通すことを習慣としていたという。新聞をいつも買い求めるような家は、大正から昭和初期にかけてその集落ではここくらいだった。その意味でタツエさん、フジさんは女性であっても、ある程度までリテラシーをめぐる状況には恵まれていたことになろう。それは逆にいえば、他の家ではリテラシーに対してより否定的な状況が続いていたということの意味する。⁽²⁾昭和の末

になっても読み書きをしている者に対して、年配者の間ではガクシヤという揶揄的かつ否定的レッテルを貼ることもあったのが実情だ。

そうした状況を勘案すると、婦人会活動およびそこから派生した婦人グループが、集落の中で一定の社会的地位を確立していったとはいえず、その読み書きの活動に対して否定的なまなざしも向けられていたことは想像に難くない。八幡婦人学級名義で文集『灯』をA集落の婦人グループが公にする前史として、ノートにそれぞれが手書きで文章を綴り、廻覧して読みあっていた廻覧文集が存在していた。こうしたより私的な色合いが強い廻覧文集の延長線上に、謄写版印刷の文集が存在していたことは、女性のリテラシーをめぐる規制の反映として受け止められよう。

このノートは、フジさんの手元に五冊、保管されていた。一冊目の表紙には「廻覧文集巻1・2／36年11月3日文化の日」と、ノートの最初の記述があった日付が記入されている。あえて「文化の日」と入れていることに、文集に対する強い意気込みが感じ取れよう。他方、五冊目の最後のページにある文章の日付は「四十三年十一月二十二日」となっている。七年半近くにわたって文集が続いていたことが読み取れる。

『廻覧文集』を始めた契機は何だったのか。一冊目のノート冒頭の執筆者はタツエさんで、ラジオ放送の内容に触発されたという経緯がそこには記されている。昭和三六（一九六一）年七月のある放送で、県内西蒲原郡の婦人グループによる廻覧文集が紹介された。文集を作ることによってグループのメンバーにもたらされた利点は、タツエさんの記述では「今ではノートが廻ってくるのが待遠しい位だ。これを書くようになってから、家がとても明るくなった」「この文集のおかげで、皆姉妹のような親しみを覚え、いままでよく判らなかつた人とも、気が通じ合うようになった」というものだった。そこで「私も同好者数人^マ?でこ

うしたグループをつくりたいと思った」と、新たにこのA集落でも始めようとした理由をタツエさんは記す。

一冊目のノートの裏表紙には「農閉期はなるべく早く十日位で廻しましょう」という言葉とともに、「廻覧順序」がペン書きされている。それを見るとタツエさんが出発点となっていて、フジさんが最後に来るような順番で、合計一〇軒の家の屋号が列挙されている。その他に線で消されている屋号が三つほどあるので、当初は一三人が参加者だったことになる。タツエさんの趣旨に共鳴する婦人が一定程度、いたことがわかる。それぞれが文章に自分の名前と執筆の日付を明記する、というのが文集での決まりだ。

とはいえ廻覧が必ずしもスムーズに行われてはいなかったことをうかがわせる記述が、ノートの随所に現れているのも確かだ（以下、『廻覧文集』からの引用には、その日付を付記。「六ヶ月振りに廻覧文集を手にして」（三八年九月二二日）、「懐かしき文集八ヶ月ぶりにまわつて来てからも二週間も過ぎやうとしている」（四〇年一月二五日）といったように、十何人かのグループで廻覧であっても実際に手元に届くまでにはかなりのインターバルを要していた。こうした遅れの理由は「書かうと思ひ乍らさつぱり書けなく毎日が忙しいで暮れてしまふ」（四〇年一月二五日）という一文に集約されよう。すなわち、書くことの困難さと多忙である。農繁期はもとより「毎日土方に出ておりますので、夜は、子供の世話や、お洗たく等でおちつきません」という言葉に示されるように、高度成長期のただなかにあつて土木建設業等、農作業以外の仕事に婦人たちが従事するようになっていたという事情も、そこに関与していた（四〇年一月二五日）。

そうした制約の一方で、『廻覧文集』は婦人たちに多様な文章表現を

可能とさせ、また相互の関係性をいっそう、密にさせていく道を開いていった。『廻覧文集』を見てみると、日常の暮しの一端、日々の思いをつづったエッセイに加え、詩や短歌も登場している。こうした表現形態によって、自らの思いをより多様な形で表出させるようになった様子が、『廻覧文集』の記述から読み手に伝わってくる。

さらに互いの文章を読みあうことで生まれる関係性が、ここに生じていく。婦人学級としての活動は、すでにA集落でもなされていたのは確かである。たとえば『廻覧文集』を始めるようになった年、『公民館報さんぼく』第五三号誌上には「テゴ作りを学ぶ」と題して、A集落の婦人学級の活動紹介がある（昭和三十六年）。これは学級の活動の一環として三〇人ほどが参加した、荷を背負う道具であるテゴを作るための二日間にあたるわら細工講習会の参加記である。またその翌年の『館報』第六二号にも、「料理の腕くらべ大会記」として、この婦人学級での参加者手記が記事となった。それによれば雑誌『家の光』を参考として、グループごとに料理の腕を競い合うと同時に、レクリエーションとして歌や踊りを披露しあうといった集いだった。「仕事から、また家庭から解放されてのんきに、にこやかにすごした料理研究会でした」と、手記は締め括られる。テゴや料理を作るといった個別の活動は一過的なものである。だが文章を相互に書きそして読む行為は、ノートという何度となく手にして読み返すことのできる媒体を通して、グループのメンバーならば誰しも反復可能である。婦人学級での単発的な活動とは異なる性格が、ここから生じてこよう。

そうした反復によって生じる関係性を端的に示すのが、次に挙げるような文章だ。「だんだんノートがいつぱいになってくるのが、本当に楽しみですね。ずっと前のを読み返したりするのも、感心したり、よろこ

んだりして、こうした子供達を寝かせた夜のひとときを、楽しんで居ます。本当に良いお友達が出来て幸福です」（日付記載なし。四二年一月一五日と二月一〇日の間）。文集に掲載された文章を何度となく読み返すことによって、その書き手との関係がよりいっそう密に感じられるようになっていく様子が、この一文からは伝わる。

それは同時に『廻覧文集』自体への愛着にも転じるものであった。たとえば「三ヶ日過ぎてコタツに我一人／文集を友に静かなる正月」という短歌（四一年一月五日）は、「友」として文集への親しみを表現する。また別の婦人のエッセイでは、「私たちのマスコットの文集が久々に廻って来たので、なつかしさに、やりかけの仕事もほったらかしてむさぼるように読んだ」（三八年二月七日）とあり、ここでの文集は「マスコット」扱いだ。

旧村単位の八幡婦人学級名義ではあれ、実質的にはA集落の婦人グループの手になる文集『灯』の創刊は昭和三八（一九六三）年。刊行はたんなる婦人学級としての義務的なものではなく、『廻覧文集』の書き手相互による親密な関係性と文集自体への愛着の延長線上に位置付けしうるものとなった。『廻覧文集』には、『灯』編集上の要役を担ったタツエさんの文章がある。以下はその一部だ。「待ちに待った私たちの創刊号『灯』が手に入った時の感激は永く忘れることが出来ません。あくまで私たちの自主的な発意によりあんなにきれいな製本が出来ました事は、グループ員一同の協力がなくてはとても出来る事ではありません」。婦人たちの「自主的な発意」と「グループ員一同の協力」を可能とさせたのは、いうまでもなくこれまで『廻覧文集』によって培われてきた「書くこと」「読むこと」を介して立ち上げられる共同性だ。そうした共同性を再認するべく、タツエさんは「やろうと思えば出来ます。でも一人

や二人では駄目です。みんなの心が揃って初めてああした立派な文集が生れたのです」と強調した(三八年九月二二日)。世代の近い婦人同士による共同性が『灯』によって、より自覚化されていったことが文面からは伝わってこよう。それがゆえに『灯』は昭和四七年まで、一〇年ちかく継続しえたのだった。

「書くこと」「読むこと」を媒介とした共同性は『灯』の創刊ばかりでなく、さらにA集落の所在する岩船郡全体に会員を持つ同人雑誌『地ひびき』への参加という形でも、展開していく。それは集落、あるいは町村といった行政単位を超えた関係性の広がりを参加者にもたらしていくことになった。

『地ひびき』の創刊は昭和三七(一九六二)年一月。当初、謄写版による体裁で、四五年の三五号からタイプ印刷に衣替える。年四回の発行である。『地ひびき』が目指したものは何か。昭和三八年刊行の第四号「はしがき」には「『地ひびき』はひびきあいだと思ふ」「吾吾は本質的なものを求めている。誰かが高まればみなに影響する。みなが高まる機縁を持つ」といった言葉が示される。同人として参加する者相互の関係性が「ひびきあい」として、まず規定される。そして『地ひびき』のようなものを育てていく場合、いちばんだいじなもの感動だと思ふ。自分の命に感動する。だから他の命にも感動する。感動するから表現する」といったように、「ひびきあい」を支えるのが感動による表現であり、文章をつづることの意義が説かれることになった。

『地ひびき』に参加していたのはどういった地域、職業の人たちだったのか。間歇的に同誌には「同人名簿」が掲載されている。最初のもものは昭和三八(一九六三)年の第五号掲載で、四三人の名前が見出せる。そのうち、山北村全体での同人数は八人で、タツエさんの名前もそこに

はある。とはいえより一般的な傾向を見出すために、総計一三七人の同人が掲載されている昭和四一年刊行第一四号の同人名簿をここで取り上げたい。まず居住地域では、岩船郡内が八九人と大勢を占め、次いでその他の新潟県内が二〇人、東京や山形中心に県外居住者が二八人となる。同人全体の六五・〇パーセントが岩船郡内居住といったように、『地ひびき』は主に郡を単位とした同人に根ざした組織³⁾だったのである。名簿には大雑把な職業区分も示されており、空欄もあるとはいえ一定の傾向をつかむことが可能だ。一番多いのが「農業」で四三人、それに次ぐのが教員で二七人となる。また性別については記述欄がないので正確には把握できないが、明らかに性別が判断できると思われる人名一三二人のうち、男性は八八人、女性は四四人を数えた。全体の三分の二を男性が占めているわけだが、この比率は地域によって異なっているのも事実で一概には言えない。タツエさん、フジさんの住む山北では、男性が一三人であるのに対し女性が一五人といったように、同人の男女比を見ると女性が多い場合もあるからだ。

『地ひびき』の創刊と展開は、同時代的な状況でいえばサークルの戦後史という脈絡の中に位置付けられよう。さまざまな欲求の充足や課題の解決をめざしてつくられた自主的な集まりをサークルと規定した大沢真一郎は、戦後のサークル活動について大きく三つに時期区分する。戦後の出発から始まり朝鮮戦争を経て次第に敗戦の影が薄れていく一九五〇年代前半が第一期、サークルが開花した一九五五年頃から、一方で活動が風化し他方で成熟しつつ自立への傾向を強めていく一九六〇年代前半が第二期となる。第三期は一九六五年以降、ベトナム反戦運動の過程でサークルにルネッサンスが起り、その活動が新しく見直されていく時期というのが、大沢の区分だ〔大沢 一九七六 七二〕。婦人学

級などを母胎とする各種文集や『地ひびき』の刊行時期は、大沢の時期区分によれば第二期に該当する。この時期は、同時に参加動機を戦略的に「母」や「主婦」に求めるサークルと、それに対抗して女性本来の無名性に立ち返ろうとするサークルという、異なったタイプのサークルが登場し、ジェンダーの視点からサークルのあり方が問われていった天野正子という「天野 二〇〇五 二三」。

『灯』や『地ひびき』の誌面からは、ジェンダーという観点で現状に批判的なまなざしをもって向き合う姿勢はとりたてて見出せない。とはいえそこには農村の婦人にとって文章をつづるといふ本来の困難さと向き合う姿勢、それがゆえに「書くこと」「読むこと」を重視する姿勢が多かれ少なかれ見出せるのも確かである。

『灯』執筆者の『地ひびき』参加はどのようになされていたのか。『地ひびき』の目次を創刊号から順に見ていくと、最初の参加者はタツエさんで、昭和三八（一九六三）年の第五号からということがわかる。この号に「親しかりし従姉逝きて」と題して、五首の短歌を寄せているのが初出だ。次いで翌年刊行の第六号では「五号を読んで」と前号への感想と、さらに「山道」というエッセイを寄せた。その冒頭には括弧書きで『廻覧文集』について言及されており、「私の最初の綴方をみなさんにお目にかけていると思います。何しろ高等小学校を出てから数えてびつくり、三十一年目でありました。それ以来初めての作文です」と続けられている。集落での文集『灯』とほぼ同時並行で、タツエさんが自ら文章を公にしていった過程がここからは読み取れよう。その参加は公民館活動で指導的な立場にあった斎藤勝弥の勧めによるものであった。

同じ号の「五号を読んで」には、「私も周囲を見廻して適当と思われる同姓を内心物色中です。第六号は女性のメンバーが相当増えるそうで

期待しています。真にひびき合える友をたくさん得たいという内心の強み、何物にも替え難く尊いものと思っています」といったように、「書くこと」「読むこと」という行為を通じた共同性を模索する姿勢が表明されている。そうしたタツエさんの呼びかけを受け止めて『地ひびき』同人となったA集落の婦人たちによる文章が、早速第八号（昭和三九年）の「たより」欄に紹介された。「よんで行くうち、深い愛情にみたされた心地がして、あたたかいぬくもりを感じました。又、いつかお逢いした方々ばかりのような気がして、なつかしく感じられました」という表現からは、『廻覧文集』で「書くこと」「読むこと」を通じて形成された共同性が、さらに未知の書き手／読み手に対しても広がりを見せつつあったことが読み取れる。その後、タツエさんの妹であるフジさんの文章が『地ひびき』に登場するのは、昭和四〇（一九六五）年の第一〇号。翌年、第一四号掲載の同人名簿では、A集落での参加者は六人を数えるまでになった。この内五人が女性で、全てが『廻覧文集』執筆者の一員である。

『地ひびき』での「書くこと」「読むこと」を媒介とした共同性は、具体的にはどのように形成されていたのか。一つは改まった文章形式ではなく、編集者その他同人に宛てられた手紙をそのまま誌面に掲載するというでなされていた。手紙という形式の手軽さ、そして手紙を書くという行為自体に含まれている相手への親密性の表出が、ここでは共同性への回路として有効なものとなった。さらに同人が一同に集う場が年に一度設けられるようになったことも、大きな意義を担う。昭和三八（一九六三）年の第四号には早速、集会の最初の通知が誌面に掲載された。「二度も会ったことのない方が多いので知りあいたい。知っていればお便りランを読むとき張り合いが出る」と、端的にその目的が示

される。合わせて集会には『地ひびき』一号より全部持参。批評し合うため」と、あくまでもここが「書くこと」「読むこと」に根ざす共同性のためのものであることが強調される。『廻覧文集』だけではなく、さらに『地ひびき』への参加はA集落の婦人たちにとってこれまでにない世界の広がりをもたらす性格のものとなった。

最後に 昔話を語るとういこと

本稿の最初で述べたように、タツエさんとフジさん姉妹それぞれから筆者は昔話を語ってもらい、その報告を行っている。このお二人との交流が、筆者にとって昔話との出会いとなった。とはいえこうした出会いがそもそもどのようなものだったのか、正確な記憶はない。

筆者が初めて山北町に訪れたのは、おそらく筑波大学の学部四年のときのことだったかと思う。当時、大学院生を中心に「筑波大学さんぽく研究会」が結成されており、町の教育委員会から『山北町の民俗』全五巻を刊行することになっていた。その第一巻『年中行事』のための調査補助として参加したのが最初だったように記憶するから、昭和五九（一九八四）年のことだろうか。おそらくその際、院生に引率されてタツエさん宅にうかがったのが初対面だったかと、うる覚えではあるが思う。お二人と院生とは、もう何年も交流があり、そうしたことから紹介だったのであろう。筑波大学関係者とお二人のかかわりは、たとえば学部学生の国原（旧姓・大江）景子が卒業論文のための昔話調査で昭和五六（一九八一）年に訪れていたから、その時点ではすでにあったことになる。

その後、筆者は山北町にたびたび足を運ぶようになり、お二人のもと

にも何度となく通わせていただいた。タツエさんは自分のもとに訪れた筑波大学関係者の氏名をノートに控えていた。そして面識を得た学生や院生からの手紙や葉書を、タツエさんはうれしそうに筆者に何度か見せてくれたことを覚えている。このような関わりのもとに、筆者もお二人と面識を得ることができたのだ。むしろ調査の過程でうかがったことは、『山北町の民俗』に掲載する、といったことは了解事項だった。民俗調査自体、タツエさん、フジさんにとっては自らの体験を他者が文字化するという点で、それまで関わってきた「書くこと」「読むこと」の実践の一形態として受け止めていたのではなかったか。さらにこうした他者との開かれた関係性を持つことは、各種の婦人会、婦人グループ関係の集まりや『地ひびき』を通して体験してきたことの延長線上に位置付けられるものではないか。

タツエさん、フジさん姉妹が『公民館報さんぽく』に「方言民話」を掲載した昭和三〇年代、「民話」の集成を通して婦人層に求められていた主体のあり方は、大きくいえば二つあった。従来、姑が語るものであった昔話を、嫁世代自らが集成して子どもたちに語りかけていく主体となるものが一つ。それは嫁としての独自の社会的立場を打ち出すことであり、婦人会や各種婦人グループの存在と活動が背景にはあった。今ひとつは文字を通して昔話を対象化する主体であった。これもまた婦人会などの場によって「書くこと」「読むこと」の機会が保障されるようになったことが背景にあり、そこから昔話を語る／書く主体が可能となっていく。タツエさん、フジさんはそのような主体として『館報』に文字化した昔話を寄せるだけではなく、筆者も含めて大学生に対して昔話を語るようになっていった。さらにフジさんは近隣の公民館の要請で、昔話を語る機会を持つようになった。

高木史人は昔話の語り手が小学生だった時の経験に着目し、「数百話クラス」の語り手は「話し方」授業をはじめとする学校教育を通して誕生した、その意味では「近代的」な語り手なのだ、と論じている。すなわち学校教育によって「語るいとなみ」という人間の生きざまの中に「書くいとなみ」が構造化され、内在化されるという変質を被った語り手が誕生したというのだ（高木 一九九五 六三、六八）。しかし「書くいとなみ」を構造化していく契機は、学校教育だけではない。戦後といえば婦人会や関連する婦人グループ、さらに各種のサークルへの参加といった契機も大きな意義を担ったことを、タツエさん、フジさん二人の昔話は示している⁽⁴⁾。そしてそれは昔話を語る／書くという関係性をも、その根底で規定するものであったことを、筆者をはじめとする筑波大学の学生との関わりは示している。

参考資料 石山タツエさんの昔話

以下に掲載するのは、石山タツエさんによる昔話である。二つは共に同じ内容の昔話で、口承での語りを筆者がテープ起こししたものと『公民館報さんぼく』に石山さん自身が文字化して掲載したものと、二つのヴァージョンを収めた。前者の題名は「フーフーパーパチ」、後者は「利こうな小僧」で、『日本昔話大成』では「小僧改名」と題されている昔話だ。

「フーフーパーパチ」 語りのテープ起こし

昔、あっけだんにの。

ずっと山奥の寺に和尚様とカカと小僧っ子二人いたっけだんにの。で、正月来たんで、餅もいっぺえついたりしてもちたり、また酒も買ったりもちたり、いっぺえあっけだんにの。そうしてこつど和尚様とカカはの、小僧方、夕飯食べてすつと立つと、「ネラ（お前達）寝れやい寝れやい」とはよ、寝せておいてな、そうしてこつど、しばらくたつと、ジロ（囲炉裏）の中へいっばいとな、カカさは餅好きだんにの、いっぺえ焼いてはそうしてこつど、フーツとふくれてくると、フーフーパーパチと叩いてな、黄な粉ついたりしてうんめえ餅食うてな。「和尚様、いい餅だ、うめえ餅だなあ」なんて言うては、そしては食うただんにの。こつど和尚様はなんぼか酒好きだんにの。そしてこつど酒わかしておいてから「おれは、んだらいつぺえ飲もうかいな」なんて酒、あけて、そうして杯あけて、一人で手酌して飲んで。「ああ、いい爛だなあ」つてそう言うては、酒飲むつてだん。カカさはフーフーパーパチ、和尚様は今度「うん、いい爛だなあ」つて。

今度、小僧方とても寝られねえだんにの。こつど、一人の小僧は餅、好きでしょうがねえんだと。一人の小僧は酒ほしうてどうもなんのうて、小僧方二人して相談しただんにの、夜まに寝てて。「こんだことでは、おらはいつんなつても好きな餅も食わんねえし、好きな酒も飲まんねえさかんで、あれしようつて、名前変えてもらおう」つてな、「どんないい工夫あるや。」そうしたらな「寝てからまたカカさ、餅あフーフーつていうたらハイつて。おれそうせば、餅の好きだんに、おれハイつて出てくしの。そうしたらこつど『イイカンダナア』つていう名前つけたんは、和尚様『いい爛だなあ』つていうたら、ハイつて出て行くしのう」つ

て言うたば、よしよしって。

そして次の朝げなつたつてのう。「和尚様、和尚様。おれ二人して願
い事あらあんだが、聞いてくれないか」ってば、「何だや」って。「おれ
なんでもいうこと聞いていい小僧、なるさかでの、おれこと、今夜から
名前変えてくんねえかや」っていうただん。「どう変えればいいや」つ
たら、餅の好きなんだんはの「おれこと、フーフーパーチパチっていう名
前、つけてくれっちゃあ」つたば「よしよし簡単だ、なんにもそんどこ
とあれだし、そうせばそうして呼ぶざいのう」ってそういうたば、そう
したら酒の好きだんはの「和尚様和尚様、おれことは、んだらイイカン
ダナアつて名前にしてくれっちゃあ」つていえば、「おお、いいざい、
いいざい」って。

そしてあれだど。夜になつたんだんさの。夕飯食べてな、そして流し、
しまいしてあれしたばまた、例のようにの「ネラネラ、後は部屋入つて
寝れやい」って、そうだつてだんにの。そして二人してくすくすと笑い
ながら、こつど耳立てただんにの。そしてずつとしばらくたつたば、カ
カさは囲炉裏端にの、わたし網出して、餅いっぺえ焼いただんに。そう
して今度、餅が焼けてフーツとふくれてきただんにな、そしたば一つ
とつてフーフーパーチパチ、フーフーパーチパチってだんにの。そうしたば
ハイって、その名前付けたのは出はつてだんにの。そうして今度たまあ
げてあれだども、フーフーパーチパチって名前もろうたんだから、あたり
まえだし「ええ、ええ、あれつだけはや。んな、おめえ、餅好きだがや」
「おれ、餅あ大好きだあ」「んだら食えつちや、食えつちや」って、食べ
らしただんにの。そのうちこつど和尚様、あれだど。「いい爛だなあ」
なんて銚子から杯あけて、ぐいっと飲んだつての。「ああい爛だなあ
あ」って、そうしたばもう一人のがハイって、戸お開けて出てきただん

にの。そして「えー、んな、あれだがや、酒好きだがや」「だあ、和尚様、
酒好きでどうもならないども、和尚様、毎晩げ飲むあんと、ほしうてし
ようねっけども、我慢しただがや」「えー、悪いっけなあ。はよ飲め飲
め」つての。そうしたらこつど「悪いっけなあ、ねらもそんなに好きだ
んだば、毎晩げ、仲ようして、餅もいっぺえあるし、酒もいっぺえある
し、毎晩げ飲むうざいのう」って、そういうての、そうして仲ようして
暮らしたつけど。

あとはとつびんからから、あとねっけど。

「方言民話 利こうな小僧」『公民館報さんぽく』第64号（昭和三七年）

もがしやあつけど。ある山寺えなあ、和尚様ど、カガど小僧二人住ん
でいたけど。秋んなつて檀家へ法事やいっぺえあつてなあ、餅だの酒だ
のどつさりもろうだけどや。和尚様方每ばんぎ、小僧方どねせでがだ、
わがだばり、酒のんだり、餅くうだりして、喜んでいたけど。小僧方、
夜長だあんで早よねどうねあんに、毎晩ぎはよう寝れんて言うあんで、
あつとぎねたふりして、障子に穴あげで、二人してのぞきみていだど。
そうしたばなあ、小僧方ねだるうに、又始めつかで、和尚様大つき徳
利に酒たつぱり入れて茶がまの中へ入れだど。カガはわだしにいっぺえ
餅あぼつたど。和尚様そのうち、いいかんだなあで、呑み始めど。わだ
しの餅もプツとふくれ上つたど。そうしたばカガ両方の手に餅一つず
つ持つて、フウフウで吹いでから、パチパチで餅ただいてがら、うまそ
うに食うだど。

それ見て小僧方も、ほしうでどうもなんねえで、どうしたらおらも
酒呑んだり、餅くうだりでざるがど、相談したどや。いい工夫できたあ
んで、その晩ぎは寝だど。つぎのあさげになつたど。一人の酒好きなあ

僧は、和尚様に、おれごと今度からエエカンダナアという名めえにかえ
てくりでいうだど。ヨシヨシでいうだど。

もう一人の餅好きな小僧はカガにおれごと今日からフウフウパチパチ
でいう名にかえでくれでいうだど。これもヨシヨシでいうだど、二人の
小僧夜になるあの楽しみにしていだど。夜になって、小僧方ねれやえで、
いうあんで、ハイでいうで、ねだふりしてまちかめつたど。又和尚様酒
かんしてカガは餅あほつたど。和尚ニコニコで、ええがんだなあで、
大つき声だしたど、酒好きだ小僧ハイッてでとんでいったど。そのうち
餅も、プウツとふぐれ上つたど。そうしたばカガ、いづもの様に、フウ
フウパチパチで叩いただど。餅好きな小僧も、今だど思うでハイッてで、
とびだして行つたどや。和尚様もカガもなんぼかたまげだど。そうして
ねらも、そんなにほしがやでで、腹いっぺえのませだり、食わせだりし
たけどや。それなら毎ばんぎ、みんなして仲良く酒呑んだり、餅食うだ
りして暮らしたげど。

あどねつげど。

(1)「働き者に金が授つた話」は、国原(旧姓・大江)景子の調査時点
でのフジさん自身による題名では「アネ様やーい」、「利こうな小僧」は
タツエさん自身による題名では「フーフーパーチパチ」である。

(2)二人の場合よりも後、一九三〇年代の自小作農の一青年の読書に
ついては、高田知和の論考がある〔高田 二〇〇二〕。

(3)岩船郡内での市町村別の会員数を多い順に示せば、山北町が最多

で二八人。以下、神林村の二五人、村上市の一七人、荒川町の一〇人、
朝日村の七人、関川村の二人といった数になる。なお市町村名は、名簿
作成時のものである。現在は関川村を除き、合併して村上市となってい
る。

(4)むろん、こうした昔話を語る／書く主体を可能とした条件はこれ
にとどまらない。外在的な条件として、各種メディアによる昔話の対象
化という事態も勘案しなければなるまい。たとえば現在「民話のあるさ
と遠野」として知られる遠野の語り部の一人、鈴木サツが著名になった
契機は昭和四六(一九七二)年のNHKラジオの取材だった。この時点
あたりから遠野の人々が「昔話」や「民話」の存在に改めて気づいたと、
石井正己は述べている。〔石井 二〇〇二 二〇四～二〇五〕。

天野正子 二〇〇五 『つきあい』の戦後史 サークル・ネットワーク

の拓く地平』吉川弘文館

石井正己 二〇〇二 『遠野の民話と語り部』三弥井書店

大沢真一郎 一九七六 「サークルの戦後史」思想の科学研究会編『共

同研究 集団』平凡社

川森博司 二〇〇〇 『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会

重信幸彦 一九九七 「御伽噺、童話、民話」『岩波講座 日本文学史第

17巻』岩波書店

高木史人 一九九五 「昔話の語り手」の一九〇〇年 『数百話クラス』

の語り手の誕生』『口承文藝研究』第十八号

高田知和 二〇〇二 「農村青年の読書経験に関する個人生活史的考察」

『出版研究』 33

武田正 一九九三 『昔話の現象学―語り手と聞き手のつくる昔話世界』

岩田書院

千野陽一 一九九六 『資料集成現代日本女性の主体形成 第四卷』ド

メス出版

辻智子 一九九八 「農村で女が『生活を書く』ということ―一九四五

―一九六〇年代の生活記録運動から」『国立婦人教育会館紀要』第

2号

鶴見和子 一九九八 「生活記録運動の戦後と現在」『コレクション鶴見

和子曼荼羅Ⅱ 人の巻』藤原書店

野村純一 一九八四 『昔話伝承の研究』同朋舎出版

矢野敬一・国原景子 一九九二 「姉妹の語る昔話―同一経路からの話

の語られ方の相違」『山北町民俗論集』第2集

※本稿はとある論文集に掲載のために、二〇〇六年に脱稿した。だが諸般の事情で企画自体が頓挫し、本稿は宙に浮いたままになった。それを今回、紀要に掲載することにした。執筆後、このテーマにまつわる仕事として重信幸彦「運動の時代と「聞き書き」という実践―一九五〇年代日本における民話運動とサークル運動」(『日本學』第29輯、東國大學校文化學院日本學研究所 二〇〇九年)、鳥羽耕史「一九五〇年代「記録」の時代」(二〇一〇年、河出書房新社)、山梨あや「近代日本における読書と社会教育」(二〇一一年、法政大学出版社)他、公刊されたが残念ながら本稿には参照し得なかった。